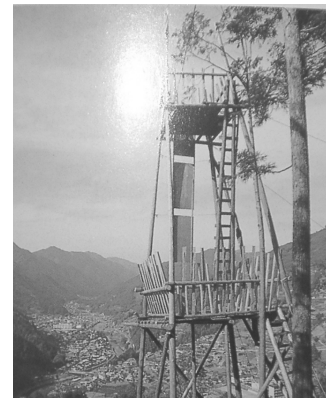


道や川と城 出典：「ふるさと古城の旅」(海馬出版)



物見の塔 出典：「静岡県の城物」(静岡新聞社)

## ■ 清水区の旧柏尾村に幻の城があった！

今から3年ほど前に静岡市清水区柏尾の民宿にぞろぞろと村人達が集まった。「柏尾のルーツを探る」と題した歴史探訪が、写真家であり古城の研究者でもある静岡市在住の水野茂氏を迎えて始まった。

日本の伝統的な城の作られ方やその時代背景についてのくぐり、武田の軍略と絡み緊迫した情勢を知る事となった。

地形を活かした山城は、規模や場所により様々な役割を担う事となる。見晴らしの良い場所、急峻な崖、水の涸れない河川、狭い道などの条件と人や馬の溜まりを設けた平地、戦に備えるための田畑、基本的に見張り城(砦)であれば二段に平地を築き、上段で軍勢を采配することとなった。

出城、見張り城、砦、様々な呼ばれ方をする古来の山城は、戦時を外れて安泰を持続するためにも必要であった。つまり、いざというときの砦である。

江戸時代の安寧が長く続くと、砦は作物畑や山林に変貌していくこととなり、名前だけが残ることとなった。子どものときに遊び駆け回った山は、ジョウヤマと呼ばれ親しまれていたが、水野氏の講話で典型的な日本の見張り城だということが分かった。

さらに平成12年、水野氏は柏尾村の柏尾峠から龍爪山へ向かう稜線の長尾地区に砦があることを発見していた。

講話の終了後グーグルアースで見ると幾何学模様の場所が見つかり、砦はここに違いないと見当をつけ、70歳の長老を筆頭に4人で向かった。道に迷いながらも砦跡を発見し、見晴らしの良さや石垣に感動した。平山地区と柏尾村は、つい最近まで互いの村での嫁入りが盛んで村境の峠は嫁入り峠と呼ばれていた。龍爪山まで他人の土地を通らずに行けたという大地主も、柏尾村に存在した。

かつて鎌倉時代、梶原景時が源氏の勢力から逃れ清水区大内近辺で地元の豪士に待ち伏せされ、殺されることになった。この梶原氏の家臣の長尾氏が、弔いのために相模の国から部下を率いて、現在の長尾地区に移り住むことになるのだ。

相模の国の地名「柏尾」がどうやら鎌倉時代あたりに付き、峠を越えて交流が盛んだったことが推察される。ちびまるこで有名になった巴川の支流の塩田川は、柏尾村と梅ヶ谷村を分けており、長尾砦はその梅ヶ谷地区に面し、そそり立つ斜面の上に陣取られる形となっていた。また柏尾村中央を流れる山の神川(蛍やカワセミで人気)は、ジョウヤマのところで二つの川が合流して一つになる自然の環濠であった。

さて見張り城はなぜ必要だったのか。いつ襲来するかしれない敵の情報を傍受・伝達する手段として欠かせない存在、普段は野良仕事で食い扶持をつくり、緊急時ノロシを上げて隣村へ知らせるなど重要な役目を担っていた。

昭和30年代まで柏尾村のジョウヤマには炭焼き小屋があった。馬場先や軍田(いくさだ)という字名が残っている。また斎場も存在した。柏尾村の「ジョウヤマ」は確かに「城山(じょうやま)」だったのだ。現在は開発され団地となっているが、瀬戸物らしき雑器や調度品も見つかっている。歴史探訪の夢浪漫は果てず、いつしか心の弦を弾ませてくれる。

注 本ページの挿絵や写真は柏尾村の城山ではないが地形が似ていたため掲載。現状は清水区柏尾の日立団地付近をグーグルアースでみてほしい。民宿かしおでは自然学校や講座を企画実施している。

栗田正光(地域文化財専門家・研修 二期生)